

歌人・浜口英子と台湾

野口 周一^a

^a 湘北短期大学

【キーワード】

台湾 『あらたま』 下村虎人 陳奇雲 『あぢさゐ』 植村蘭花 『渚』

はじめに

浜口英子は、二〇一〇年（平成二二）七月二十四日に百四歳の長寿を全うした。英子の晩年の歌に、

血の色に霧社の桜は咲くと言ふ誰か記せし時の事件簿

（『草原短歌会会報』第二二七号、二〇一〇年二月）

がある。昨年九月二十二日、私はその霧社に赴いた。霧社は台湾の中部・南投県仁愛郷に位置している。私は台北から高速鉄道で台中に行き、台中からバスで埔里に入り、埔里でタクシーに乗って仁愛郷に到った。街の中央にある仁愛小学校から眼下に見える碧湖は深緑色の山々の木々を映してエメラルド色に輝いていた。

その霧社において、かつてどのような事件が起こったのか。一九三〇年（昭和五）一〇月二十七日、午前八時頃、台中州霧社公学校で、恒例の秋季合同大運動会の開会式が始まろうとしていた。そこには、お祭りと寄り合いを楽しもうと近在の日本人関係者の殆どが集まっていた。その日本人の皆殺しをはかって、極めて周

到な準備と計画に基づくタイヤル族の襲撃がなされたのである。郡守を始めとする来賓、運動会参加の日本人男女、子どもなど百余名が犠牲となった。台湾総督府は、これまで理蕃事業が最も成功した模範地区として霧社を内外に喧伝していただけに、怒り心頭に発して正規軍ばかりか航空隊まで出動させ、近代兵器の機関銃、大砲、毒ガスなども実験かたがた使用し、二ヵ月余りを要して鎮圧したのであった（例えば、戴国輝『台湾―人間・心・心性―』岩波書店、一九八八年、七六―七七頁、参照）。

私は、日本人の感覚として「桜は四月、色は白かピンク」と理解していた。ところが、件のタクシー運転手から、「お客さん、あと一ヵ月遅かったら桜が咲いていました」という話から、「台湾の桜の色には三色があるんです、白、ピンク、赤です。この霧社の桜は赤なんです」という話を聞きだしたのであった。今さらながら、自らのステレオ・タイプな思考を愧じたものであった。

霧社の桜は、所謂寒緋桜である。金平亮三著『台湾樹木誌』（台湾総督府中央研究所林業部、養賢堂、一九三六年）を翻くと、「バラ科」の節に「ヒザクラ」の項が立てられている。其処には台湾名「山桜桃（北部）」、「花は葉に先ち開花す、葉痕の上部より抽出し三ゝ五花を叢着す、基部に一对の苞あり、蕾は円筒状の鐘型、長さ七㎜、裂片は鋭形、紅色、花卉の頂は凹形、桃紅又は暗紫紅色、実は楕円形、径六ゝ七㎜、紅熟す」とある（二六九頁）。

それを踏まえると、「血の色の霧社の桜」という話が実感として迫ってくる。しかも、掲載誌の発行日時が二月であることから、英子はこの歌を晩秋から初冬にかけて詠んだことがわかる。英子は台湾在住時代に、霧社事件の話を聞いており、それを踏まえて作歌したのであった。

因みに、新渡戸稲造は佐久間佐馬太総督の「高砂族」弾圧に深

い憤りを表明し、講義の最中、机を叩いて非難したという（「新渡戸先生の学問と講義」『矢内原忠雄全集』第二四巻、岩波書店、一九六五年、七二三頁）。また、新渡戸は「佐久間総督が、仮借なき抑圧というばかげた空想に取りつかれて以来、高貴なる『野人』は、恨みの感情を蔵してきた。——それもきわめて当然である」とも述べている（『編集余録』一九三二年一月一日付、『新渡戸稲造全集』第二〇巻、二〇七頁、教文館、一九八〇年）。

本稿は、浜口英子と台湾の関係を、下村虎人、陳奇雲、植村蘭花に言及しつつ述べていきたい。

一、英子と『あらたま』

浜口英子の歌歴については、堀田武弘の大著『長崎歌人伝——こは肥前の長崎か——』（あすなろ社、一九九七年）にまとまった記述がある。ここでは、私なりに整理していきたい。

英子と短歌の関わりについては、自ら「私が歌を始めたのは少女時代、正雄に嫁ぐ以前でいわば盲めつぼうの投書によつて」（『草原と私』『歌日記（昭和五六年）』（仮称）、浜口透所蔵）、「私は昭和三年平井二郎先生の選歌を受けてあらたまに席を置いた。全くの見様見まねであったが、歌の仕事をする主人のそばでいつしかあらたま発行の中にまみれてゐた」と記している（『歌集 渚』私家版、一九七七年）。

『あらたま』については、既に「下村虎人とあらたま社」（『比較文化史研究』第一一号、二〇一〇年、参照）において述べたように、その創刊は一九二二年（大正一一）のことであり、当初は英子の夫・正雄が采配を振るい、やがて平井二郎が参画し、樋詰正治も加わり、同誌の編集・発行に関して三者が絶妙のトリオをなした。

標記のテーマについて、英子と下村虎人、陳奇雲の関係に焦点を当てながら、英子の作歌活動を描いてみることにする。

（二）子どもたちを詠う

また、私は前稿において、湖人（当時は「虎人」と号した）とあらたま社の関係について述べ、湖人の台湾時代について考察したのであった。その湖人（当時は台北高等学校校長）が他の同人とともに英子の歌を批評している記録を紹介した。

時に昭和六年四月二日のことであり、「高等学校の職員の社友だけで準同人の作を本格的に批評してみたいと思ひます」として、「四月号其二合評」が開かれ、小野寺三男治、中島源二、石本岩根、松村一雄、小山捨月、下村虎人の六人が評者であり、虎人が概ね最後に発言をする形になっている（『あらたま』昭和六年五月号）。ここでは、英子の歌、

家にのみ遊ぶする子は絵本もち我によます事おぼえたり
を例にあげたい。英子は昭和三年にあらたまに席を置いた、と記しているの、作歌を始めてまだ日は浅く、厳しい批評をうける。

三男治 二句の「遊ぶする」四句の「よます」と二つもするを
使つてあるので見た目にも目障りであり、朗詠すると殊
に耳さわりである。

源二 母子関係の情味があまりに形式的に墮して、冷ややかな
感じしか出てない。

岩根 三句は「絵本もちて」なのか？

虎人 表現が幼い。いいところを捉へてゐるが殺風景な感じが
する。言葉の味ひと云ふものを今少し考へてほしい。

捨月 僕はいい歌だと思ふナ。余りどれもこれもほめてばかり
あるやうだが（笑声）

最後に「総評概略」があり、虎人が『同人』は名人若しくは範士格である。『準同人』は四段、五段とところの新進の教士格、「内地その他の短歌雑誌と『あらたま』を比べて見て決して遜色ありとは思はれぬ。末輩に至るまで割合にクツがない。しかし一欄一欄を比較するとき『準同人』の欄で『あらたま』は実に見劣りがする。これは短歌雑誌としての最大の弱みであると思ふ」、「古い準同人は地位に安んじ、新しい準同人は位負けして堅くなってる」、「型にはまった御上品振りに小さくコチコチと固って終はず、もう少し自由奔放に振舞って見たら如何か?『あらたま』に反逆者出でよ(但しよい意味の)と叫びたい。私達は『準同人』各位を傷けるために云ってるのでは決してない。それどころか台湾唯一の短歌雑誌『あらたま』に更に光輝あらしめたいとの念から敢えて苦言を呈するのだ」と述べている。

英子もまた準同人として厳しく鍛えられていたことがわかる。後年、英子は堀田武弘のインタヴューに答えて『『あらたま』は昇格基準が厳しく、その一々昇格まで十五年かかった』と話し、「育児のために歌会には余り出られなかった」と語っている(『長崎歌人伝』七六四頁)。英子は長女・玲子を頭に女四人、男一人に恵まれた。その子どもたちを詠じたものを、福永玲子所蔵の『あらたま』から採録する。

遠歩きはじめてしたる次の子がくたびれはてしうまいなら
し(昭和十年六月号)

風邪ひける吾をいたはりて夕膳の後片づけをせむと立つ子や
女児はしぐさ可愛しわが病めば立ちて夕餉のあとかたづけも
風邪にはしかと子等病み次げば室しめてこもる暑さにわれも
よわりぬ(昭和十年八月号)

おしろいの咲く夕庭に声あげて滑台する子は病み上り

成績はたのまずといひ然か思へど子が通信簿もらひおそれぬ
病児に代り通信簿をもらふ

ラヂオの児童学習表もかべに張り夏の休みの導きを計てぬ
病みあとの体やしまらむよく遊び陽やせし子が食すすむなり
(昭和十年九月号)

子を片手にだきての立ちぬに飯時は満腹とならぬ勝ちにすま
すも(昭和十一年八月号)

はじめての海をよろこびさわけども波を恐れて子等はつから
ず

海水プールに入りてあかざる子等見れば来てよかりしとわれ
もたのしき

顔も背も色黒々と日に焦けし子がありやうは夫にも知らせむ
(昭和十一年十月号、「高雄遊行」)

はにししむ西瓜うまうまと子供等はしづくながして食べ飽か
ぬかも

神経質の子が營養の悪ければ学校にて肝油のみはじめしむ
不得手なる綴方をば氣にかけていふ子かあはれ汲みてやるべ
し

やがて我が話相手とならむ子よ素直に言へば涙ぐみにき(昭
和十二年三月号)

身軽なる暖さまたる誕生日すぎし末の子歩きそめむか(昭
和十二年四月号)

子供連れの気苦勞思へば誘はれし会も度々断りて来つ
おほよそに表立つ身にあらざれば性にかなひし家ごもり妻
(昭和十二年八月号)

七夜とて祝ふものなき吾児がため友は情の膳をたまひぬ
難き世に生れ来し子を育まむ我が氣構へも易しからざる(昭

和十九年五月号、「蓉子出生」

(二) 陳奇雲

陳奇雲については、孤蓬万里著『台湾万葉集』物語（岩波書店、一九九四年）に纏まった記述がある。万里は、「日本の各地における植民地政策が、最近ようやく検討し直され、反省されて云々されているが、政治家でない筆者はそれに触れたくない。ただ、五十年を領台した日本人にとって慰めともいべきは、そのこぼしていった短詩型文学の花びらが、埋もれることなく芽を萌えやし生いついできたことであろう」（五九頁）と述べる。その万里が「台湾短歌の揺籃」の項において、日本統治時代の短歌結社を回顧し、「この時期に台湾本島人で結社に属していたのは」として、『あらたま』の陳奇雲をあげ、さらに「昭和十五年六月七日陳奇雲が他界したときに『あらたま』が特集号を出したのが、当時としては特筆すべきことであつた」と記し、樋詰の歌をまさに特筆大書しているのである。

あらたま

陳奇雲追悼號



第九十卷 第九号
九月 號

われ死なば歎く一人と思ひ居し君を死なしむた^しだ須^し叟^しの間に

（五〇頁）

そして、その『あらたま』第一九卷第九号（台湾大学所蔵）を紐解くと、若くして逝つた陳奇雲の生涯と家族、そして歌と交友、こゝに樋詰との麗しい師弟愛が偲ばれる。

その追悼号に、英子も正雄とともに、歌と偲ぶ文を寄せている。

君も吾も病み勝ちにして弱きもの同志たがひにいたはりあひき

夏至来れば持病ゆるぶと待ちし君なにゆゑ命いそぎたまひし
あらたまは出来て届けど手にとりてよろこぶ君と会ふこともなし

我家にて酒の気焔をあげし夜が印象深き別れとなりつ

この四首は、次の追悼文を読むと、その交友の状況がよくわかる。それは「思出づるまま」と題するものである。全文をあげる。

今月も一番大事な時に平井先生も主人も出張して留守なので、御忙しい樋詰先生に又々校正をお願いしてしまひました。先生も御感じになられたことと思いますが、こんな時に陳さんが居て下さったら「私がやりませう」といつもの通りに快く引き受けて下さるのにと一入感に打たれました。

あらたまのためにつくして下さった陳さんのかくれた功績については、つぶさに知って居られる会員の方より、知らずに月々のあらたまを手にして居られた人達の方が多いことと思ふます。まことに陳さんはあらたまのために十年、弱い身体もかへりみず一生懸命につくして下さった。このことについては先生方が色々と筆を揃えて書いて下さることと思ふますから、私はお友達としての陳さんをお偲びして見たいと思ふます。

私はあらたまのなかでも一番身近に、然も遠慮のないお友達

として陳さんに対つてゐました。陳さんも毎月一二度は雑誌のことで、主人との話で見えてゐたし、主人が居なくても上り込んで私相手に時をつぶして、二人共歌のことではあたりかまはぬ気焔をあげたり、あらたまの出来栄えついで熱心に話し合ひたりしました。そんなことでいつも陳さんを一番の頼りにしてしまつて、無精な主人などは、陳さんの熱心に押され勝ちでありました。晩年には、私の歌壇抄の重い雑誌までも運んで下さる始末で、今になって余り我まますぎたと陳さんにすまぬ気持ちで一杯になります。陳さんは詩から歌に入られたので、いつでも破調がつづきましたが、御自分でもそのことにはいつも気がついて、しばしば洩してゐました。然し陳さんとしてはそこにやむにやまれぬほとばしりがあり、いつの間にか独特の調を作りあげて、殊に今年になってからの歌はいいものを見せてくれました。陳さんが大分元氣づいて来たやうですからあらたまもみんな動いて来るのではないでせうかと冗談にいつて笑ひ合つたこともいまは思出の一つとなつてしまひました。

○

陳さんが寒雲を買つたことをとてもよろこんで「渡辺さんと二人買ひました。次は夢殿ですが売切れないうちに欲しいと思ます」とうれしさうに話してゐました。丁度六月号の校正が届いた日、折よく陳さんが見ええました。その日主人は留守なので、校正が見たいといつて陳さんも机にすわりずつと目を通して居ました。

いまは陳さんの詠み終りともなつたかも知れないうた。湯の山の上にて撮らせたる写真見れば左肩あげてわが痩せにけり

私はこのうたがとても好きで感心してゐたのです。「陳さん、

私この歌とても好きです。この四五句こんないい据りは羨しい位です」といひますと、陳さんはうれしさうにニコニコして「はあ、それは先生にもほめて頂きました、もう今月も駄目かと思つて居たところ古い雑誌に出てゐた後夜といふ語が目につき、はじめてこの一連がすらすらと出来ました」といってその夜の苦吟をしみじみ話してくれました。

その時私が「陳さんは寒雲をよくお読みになると見えて大分にほひますね」と言ふと陳さんは叱驚するほどあはてて私の前から校正を引つたり「どれですか一寸見せて下さい」とせき立てました。私は呆氣に取られて「半時刻も経ぬにわが忘れあつ」このあたりはいかがでせう、陳さんはじつと見てゐましたが安堵したやうな顔で私の前に校正を押しやり、「ああ、安心しました。近頃こんな叱驚したことはありませんでした。これは全然影響ありません。何しろ寒雲に惚れ込んでゐるのでそんなこと云はれるとどきつとしますね」といったので二人共声立てて笑つてしまひました。あとで主人の話にその寒雲も陳さんと一しよに葬られたと聞いたので、それでこそ陳さんも満足されたことと思ひます。

それからしばらくして主人も旅から帰り酒も手に入つたからといふので、慰勞の意味で一夕お招びしました。その夜はとも上機嫌で話はあらたまのことと、子供の将来についての外はなく、その夜の小宴が私共最後となつて、それから一週間して亡くなったのでありました。陳さんも私も身体が当前でないので、会へば「此頃元氣ですか」これが挨拶のやうになつてゐました。陳さんはつないでゐた私共の手をさつさと振り切つてひとり切ない別れをしてしまはれました。不遇に終つた陳さんの御一生を偲び残された奥さんの二児の上に払れる御苦勞を思へ

ば自然に胸がつまって来ます。

以上、英子の平明で素直な思い出の一文である。陳奇雲が『あらたま』発行の裏方としていかに尽力していたか、歌をめぐっての英子とのやり取りは興味深い。彼が影響を受けたという『寒雲』は齊藤茂吉の歌集（一九四〇年）であり、『夢殿』は北原白秋の歌集（一九三九年）である。浜口宅を訪れた陳奇雲の姿を、長女の玲子（一九三九年）はよく覚えていると言う、「陳さんはいつも病気がちでした。痩せていました。貧乏で十分に食べられなかったのです。給与など日本人と差別され、とても低かったのです」、また「やさしい人でした。台所の方から声をかけていたのを思い出します。幼い子どもはまだ政治むきのこととはわからないし、それが幸せだったのではと思っています」と語る（二〇一二年四月一九日）。貧苦に喘ぐ境遇に身を置きながら、陳奇雲は妻子を養い、歌集を購うのである。恐らく爪に火を点すようにして貯めた金であつたらう。

浜口家で陳奇雲が正雄と酒を酌み交わす場面は、正雄も「陳さんは酒が甚だ好きであつた。酔へば平常の無口が雄弁になり、私はあまり飲まぬのでいつも聞き役であつた。強いといふがあまり強い方ではなかつた。爛壇四五本で大抵いい心持になり、おもむろに雄弁になるのである。死の一週間前であつた。恰度酒不足の時であつたし、白鶴を二本貰つたので、晩飯を共にしたいからと言って電話をかけた。早速伺ひませうと喜んでの返事だつた。酒飢饉の折からでもあつたらうが、その夜の日本酒は色もよく味もよかつた。三位ではや雄弁になりだしたのである」と書き留めている。正雄はこの一文を出張中に書き、末尾に「東京の旅館にて」と認めたのであつた。

二、『あぢさゐ』との関わり

『あぢさゐ』については、「君がため秋白日の香炷かむ——花蓮港街に生きた渡辺よしたか・みどり夫妻——」（『人物研究』第二十八号、近代人物研究会、二〇一一年）において述べたように、渡辺よしたかが花蓮港街にて大正末年の秋に始めた歌会の機関誌である。

英子の夫・正雄は、若い頃よりよしたかと交流があり、花蓮港に赴いた際、よしたかと再会を果たしたときの歌があり、よしたか編集の『あけぼの』についての書評もあり、英子にはよしたか夫妻の記憶が鮮明であった。前者については、

病み妻を常いたはりていと長き年月悔いぬ君にうたれき

とあり（『あらたま』昭和八年八月号）、後者については、私が英子を訪問した折りに「渡辺さんはいいつも奥さんを背負つて、どこにでも出かけていた」と、宿痾のため起居も叶わないみどりを背負つたよしたかを述懐された（二〇〇九年十月十七日）。

私は、英子と『あぢさゐ』の関わりは特にないものと思っていた。ところが、戦後の『あぢさゐ』の整理を始めるやいなや、英子の歌と文章が一度だけ掲載されたことが判明した。それは植村蘭花の追悼号であった。蘭花は『あらたま』と『あぢさゐ』をつなぐ存在であつた。

（一）植村蘭花

植村蘭花の略歴については、『新万葉集』が刊行されたとき、蘭花の歌も二首採られ、その略歴とともに掲載された（『新万葉集』第一巻、改造社、一九三八年）。歌は「台湾花蓮港」と題している（四五五頁）。

大洋浪とどまる間もなく河口の激つ流れと衝ち合ひ押し合ふ

岩の秀のかくれあらはれしらじらと波渦泡のたえずただよふ
略歴は「本名義隆。三十九歳。熊本県球磨郡湯前村大字湯前に生
れ、台湾花蓮港街筑紫橋通十に現住。旅館。台北市あらたま社所属
十五ヶ年間」(五一〇頁)とある。

蘭花の歌には貧窮を詠んだものが目につくが、ここでは『あぢさ
る』から四首ほど採録する。昭和二十六年七月号には、

山中に病みこもりつつ身を肥す魚をしきりに食ひたしと思ふ
生命のさ踊りいづる山の歌膽写のひまに浮びてくるも

とあり、よしたかは前者について「ややマンネリズムのきらひはあ
るが、暖いちしほの通った感あり」、後者について「これはなかな
か順直によりみあげられてゐる」と評する(八月号)。

九月号には、

おのれ空しくありたまひける亡き母はますます高く清く思ほゆ
アルプスの山にあるとふ大いなる土柱を恋ふる寂かなるべし
とあり、よしたかは後者の歌について「これは君のもつ調子だがど
こかおほどかな新鮮な芳香を放つてゐる。誰にもありがちなことだ
が、君には君の定着といふものがある。自己の観点を不断に否定し、
更新してゆかなくてはならない」と述べる(十月号)。

ところが、後述する「追悼特集」号において、よしたかは「彼の
作品はあまりに観念的であった」として、「個人としての縦の面の
独立性だけが把握されてゐて、横の個でありながら、同時に全であ
るところの、個を超ゆる無碍自由なもの、自我の観念の領域にのみ
捆はれない、自由な世界へのつながりがなければならない」と断罪
する(「植村蘭花の歌業」)。

それにも拘らず、よしたかは蘭花の歌の掲載にあたつては、「あ
ぢさる作品」「一」に処遇していたことは、彼の歌の質の高さを認め
つつ、さらなる次の歌境に到達することを求め続けていたことを意

味する。よしたかは、その証左として、

遠空を飛行機すぎぬ深き夜の月のかたむきさやかなるとき
(昭和二十八年二月号)

出されたる茶を手を受けしときにして聞え来るなり朝の遠雷
(昭和二十八年十一月号)

うるこ雲二列ならびひむがしに移らふあひに冴ゆる寒月(同
上)

をあげ、「この諸作により、ある種の自我の固執するものを破つて、
固執のない純粹客観に立つての作歌態度がほのかにうかがはれるの
であつたが」と、その期待を述べたのである(「植村蘭花の歌業」)。

(二)「植村蘭花追悼特集」

蘭花の死は、『あぢさる』誌上においては、一九五三年(昭和
二八)十二月号の「後記」に「十二月一日午後二時植村蘭花先生は
心臓麻痺のためご逝去されました」と急報されたのであつた。奇し
くも同誌上の「茶語清談」欄に、蘭花自ら「平井氏御体、心痛の種
です。少し療養的処身がほしいのですが、では」と、同人筆頭格の
平井三恭の病気を氣遣つていたのであつた。

これを受けて、『あぢさる』は五四年(昭和二九)六月号を「植
村蘭花追悼特集」号としたのであつた。渡辺よしたかは、「後記」
に「追悼の記事は、西川三来生君はじめ廃刊された『あらたま』の
選者平井二郎氏、同じく『あらたま』の主宰故浜口正雄氏夫人英子
氏の外、旧あらたまの会員で、植村氏を知る島本英夫、新垣盛仁、
藤尾いさみの諸氏から寄稿を辱ふした」、「特に西川氏は、昭和三年
から十九年までの『あらたま』誌上に発表された植村氏の作品を抄
出して寄せられた厚い友情には深く感銘せしめられた」と記してい
るように、「供華」、「故植村蘭花作品抄」、「植村蘭花の歌業」(渡辺



よしたか)、「交友二十四年——植村蘭花台湾時代の思出ばなし——」(西川三来生)、「植村御奥様へ」(平井三恭)、「蘭花さんの事ども」(浜口英子)、「蘭花と敗戦」(島本英夫)等々で構成され、蘭花の歌と人柄が見事に描かれている。

ここでは、蘭花の台湾時代と引き揚げ後の生活について紹介することにした。前掲の蘭花の略歴を補なうと、一九〇〇年(明治三三)生まれ、二〇年(大正九)に「渡台、総督府財務局会計課勤務、胃潰瘍ニテ退職闘病生活六年此ノ間歌誌あらたま同人トナル」とあり、三〇年(昭和五)「花蓮港街居住兄ヲ援ケ旅館旭館ヲ経営」、四一年(昭和一二)に「月眉ノ山ニ台湾桐三万五千本植樹」、四十六年(昭和二一)四月「帰還熊本市河原町ニテ大衆食堂経営」、五二年(昭和二七)「大衆食堂売却河原町救済市場事務員」を経て、死に到ったことがわかる。

一九三〇年(昭和五)頃の花蓮港街を、西川は「台北市よりこの花蓮港街に行くには、汽車に五時間、船に五時間ゆられて、さて上陸に際しては、当時いまだ築港もなく、遠浅であるため、三百屯の小さな船ながら沖はるかに碇泊、艀に移乗、海岸近くまで漕ぎよせ、艀先につけた太綱を投げ、えいえいと、太平洋より打寄せる大艇りの浪に艀をのせて引寄せるのでありました。だから艀と大艇りの浪の調子が合はなかったが最後、艀は浪に巻きこまれ、乗ってゐた者は全員運命を共にしなければならなかったのです」と波濤の凄まじさを活写している。蘭花の旅館経営については、「旭旅館の経営者である植村氏の兄上が、持病の喘息にて臥床がちなため」に花蓮港街に來たと述べている。ところが、一般的な宿泊料が一泊三円の時代に、西川には「三食付き一泊五十銭、しかも夕飯の膳には冬は酒、夏はビールまで付けてある」と採算を度外視している。また、蘭花自ら夜中の一時、二時頃まで話し続け、「もう夜半ですよ、他の客への迷惑を考へてくださいと、女中頭の某女に叱られ」たり、傍らに夫人を放置したまま話に熱中し続けた失敗談も語られている。

引き揚げ後の生活については、島本英夫は「熊本市内に屋台店を開き」、「貝汁とフカシ諸を看板とした」とある。その人柄については、「彼は禿頭長髯のキツネ面にも似ず、純情居士で一生を貫いたが、その反面にはまた、実にマの抜けた、昼行燈型でもあった」と説明があり、「二週間だけだから十万円貸してくれ」と言葉巧みに説き伏せられ、一片の証拠書類さえない状態で、全額を持ち去られた事件を紹介している。

最後の仕事は台湾桐の栽培で、鹿兒島の富永と云う人に会うために、契約金二十万円を携え、風邪をおして、十一月二十三日熊本を発った。これは台湾における植樹の経験を生かそうとした、蘭花の生涯を賭したものであった。鹿兒島ではアスピリンを飲みながら歩

き回り、帰日も超満員の夜汽車、車室の入り口に立ちづくめ、寒波の襲来に「貧乏故にオーバアも無く」、「熊本駅に下りて、早朝自宅に着いたときは、既に半死半生の身となり、家の入り口に倒れてゐるのを、夫人が抱へ込んだと云ふのであった」、そして十二月一日にあつてなくその生涯を閉じたのであった。

(三) 英子の蘭花追悼

英子は『あぢさゐ』の「供華」欄に四首を寄せている。

久しくを共に作歌し君のみは特に蘭花さんと呼び親しみき
貯金つば割りてもてなせし日の記憶なぜか忘れず君おもふと
き

手に受けしはがき一葉君が計をつたへてかなし空もしぐるる
はるばると枯野のをちに沈む日の寂寞としてのちなき君

また、英子はこの第二首に関わることを「蘭花さんの事ども」と題した一文にて披露している。蘭花の幸薄き人生とともに、英子の人柄を偲ぶものとして、その全文を掲げる。

思はぬ時にかなしのお便りを受けて、突き落とされた様な寂しさにおそはれた事であった。蘭花さんはもうこの世のどこにもいらつしやらないのである。同じ九州に住みながら何時か会へると思ふ心ばかりを待みにして、お会ひすることの出来なかつたことが、限らない寂しさ悔いを残してしまつた。私は植村さんが義隆と本名でお手紙を下さると何か変な氣持がした。「蘭花さん」と親しみをこめて御呼びしてゐたので、義隆といふ名は別人の如くなじまなかつた。引揚げと同時にお互に苦勞をして蘭花さんのお便りも深刻なものが書かれてあつた。おむすびの立売りをされる奥さんに感謝されたお便りなど思出される事である。飄々とした風ぼう、人なつっこい笑聲など蘭花さ

んの特徴でもあつた。あらたまのだからでも愛せられ、親しまれ、稀に見る真心の人としての思出ばかりである。私の記憶は若妻の頃によみがへる。丁度一番上の子が生れた頃であつた。或る日ひよっこりたづねてくださつた蘭花さんを主人はとても喜んで、長く話しこみ私は何か夕食の支度をせねばならなかつた。給料前でふところはさみしい折なので、何か御馳走しようにも心細い次第であつた。書斎では蘭花さんの声高な語声が聞える。さてどうしたものかと思ひあぐんだ時にふつと棚の貯金箱に気がついた。私はすっかり胸をなでおろして遂にその貯金箱を割つたのである。その頃の一錢貯金で何と三円五十錢。忘れもしない私はその金をもつて肉を買ひ夕食のもてなしをしたことであつた。よろこんで鋤焼をたべた主人と蘭花さんお二人とも私の胸のやりくりなどご存じなかつたのである。今は二人共故人となり、くさぐさの思出はつきない。四十すぎから奥様をもたれて蘭花さんは生活の上にも明るさがさし仕事にも打ちこまれて大いに生甲斐を感じられた様である。忘れ得ぬ一人として私の心の中に生きる真心の人、蘭花さんの死を悼む。寂寞として入り陽のあとのやうな切なさを感じるのは「あらたま」の人達の誰もがさうであらうと思はれる。残されたお子達をうでに立ち上がられる奥様を、丁度九年前の私の姿と同じではないかと思ふ。女一人の世すぎのきびしさに打ちかたれるやう奥さまに御願ひ申上げ度いと思ふ。

以上である。ここに登場する「一番上の子」とは玲子のことであり、玲子は「ランカさんと呼んでいました」と思ひ出の糸を手繰る。また、「丁度九年前の私の姿」とは、「五人の子供の顔を眺めつつ途方にくれていた私は、その日から女という氣持をかなぐり捨てて」（『あとかき』『歌集 渚』所収）であり、英子の蘭花夫人への思い遣り

が心をうつ。

なお「供華」欄には、狩野みちという女性が歌を寄せている。

逝きませし君なぐさめむ歌友の誠心に安らぎ給へ

茶に変わる水を進めて人生論説くゆとりこそともしかりけり

まみえねど通ふえにしの高く今ぞ清らに追悼を詠む

この狩野みちは群馬県群馬郡箕輪支部を取りまとめていた。みちの息子は守といい、二科会の著名な油絵画家であった。その守の夫人をヒデといい、みちとともに『あぢさゐ』の会員であった。この三月に、私は『あぢさゐ』の昭和二十年代の歌を調べていて、「箕輪 丸山マサ江」の「二人目の母とならむ日も遠からず胸の鼓動の静かに高し」、「吾子生れむ日を数えつつ針はこぶ白き衣に春ふくむ風」に出会った。私の母・野口愛子は既に亡いが、女学校時代に丸山マサ江という同級生がいて、その長男・丸山博（元群馬県立高等学校教員）と私は高校が同級であった。私は『あぢさゐ』の探索のために、彼に四十余年ぶりに連絡を取り、丸山マサ江から狩野ヒデに繋がり、未発見の『あぢさゐ』昭和二十六年二月号を手にすることができたのであった。私の『あぢさゐ』探索の旅も緒に就いたばかりである。

（四）『渚』における追悼

英子が主宰した歌誌は『渚』と称し、一九五二年に創刊した、ザラ紙に謄写版で印刷したものであった（浜口透所蔵）。その第三巻第二号（昭和二十九年二月号）の巻頭に蘭花の歌五首が掲げられている。

芽立ちたる柳の下の溜水うすき水の消え消えに見ゆ

日日に見る水の流のすがしさにわが風情はからまりて冴ゆ

流水のとどこほりなき安らけさ老いゆくわれはふかくふかく



ひかるる

人と成りいまだ古印の風格に遠きをおもひつぶさにぞ洗ふ
朱肉の油しみし古印を洗ひあげ初日に乾すや神氣あふるる

そして、「後記」に「今号扉には故植村蘭花さんの遺詠をのせることにした。蘭花さんは会員の方たちは知らない人であるが、私とはあらたま時代からの久しい友人で熊本在住中亡くなられたのである。こうして私が渚に関りを持つ以上一友人として、せめてもの心やりで、み魂を慰め申上げたと思ひ、その遺詠を送って頂いた訳である」と記す。

三、戦後の英子

英子の長女・福永玲子は、「戦前より台北に於て『あらたま』を

舞台に活躍していた私の父正雄は、終戦后本土への引揚げかなわず台北にて没した。私は、母と幼い弟妹と共に父母の故郷である三重村（現在長崎市畦町）に引揚げていたが、帰って来てまもなくその訃報を聞いたのである」と記す（「あとがき」『歌と日記 台湾時代』所収、あすなろ社、一九八九年）。すなわち、一九四六年三月、英子は留用となった夫を残し、子ども五人とともに紀州の田辺港に引き揚げ、直ちに長崎県西彼杵郡三重村に帰郷したのであるが、正雄はマラリアに罹り、四月六日に急逝したのであった。以下、英子の歌を記していく（出典を示さないものは『歌集 渚』に拠る）。

引き揚げ後、英子は父の家業である鮮魚仲買商を手伝い、畑の開墾もしたりして、その日その日を凌いだのである。その状況は、

ひしめきてひげ振る海老や荷の中に生きて売らるる市は遠しも
海老買ひのわがたづさふる歌誌ひとつ手帳と共に垢じみにけり

わが身はも勞しすぎたり衰へのきざしを真陽の下におびゆる
陽に焼けしうでもあらはに汐風の浜に伊勢海老の秤を握る

陽の下に腹を曝してのた打てるえいは五十斤その余ともいふ
ト口箱は明日の用意と積み上げて魚臭ただよふ仕事場を出づ

と詠われている。この第二首にあるように、英子は歌を忘れず、日々の厳しい労働も歌を詠むことにより耐え、ふとした機会から村の青年たちと歌会を持ち、既述の如く『渚』を出すのである。しかし、やがてその地を離れることが予見されたのであろうか、次の歌が残されている。

この村を去る日もあれや風寒き波止に屈み切干諸をほす

一九六二年（昭和三七）、英子は横浜市の長福寺幼稚園に開園とともに勤務、その旅立ちの歌もある。

灰色に閉されし日も負けざりしわが手のもてるきびしき歷程
苦しみて子を育てたる古家が音立てて朽ちぬわが旅立つ日
この長福寺幼稚園に、私の湘北短期大学保育学科の教え子・金子くるみが同園を自ら捜し出し、受験し、勤務したのであった（二〇一〇年四月）。

横浜では、英子は長男・透と四女・蓉子とともに生活、

ささやかに膳にのぼりし年のものと食べあひてつつましき
春

園の仕事も小さなことにも気を配っていた、

怠りてならぬ雑用小さな手帳を常にしのばせておく

やがて生活が落ち着くとともに、正雄のことが偲ばれる、「亡夫二十三回忌」として、

亡きことぞ深く身にしむ夫の死の真相をききて今は何せむ

わが頬を伝ふ涙は夫の死を聞きし日よりも浄らかにして

初期のうた遺稿となりて手にあれば若かりし日の声きく思ひ

茶碗五つ箸五人前鍋一つ家を構へしころの思ひ出

とある。正雄は長男の誕生を、

この男の子まこと男の子と驚きて言ひいひをりつ誰にいふと

なく（『台湾時代』）

と喜びを表した。英子は透の結婚を嘉して、

雑草といふ名ぞよけれいみじくも君は見てゐしわが生きざま

を

すぎゆきはなべて美し一冊の日記にしのお亡き人の声

浜口家最良の日ぞ汝がために生きしいのちの歌を捧げむ

亡き夫のみ霊やゐます弟は親代りにてしばしば絶句す

ばたばたと涙はおちぬ新嫁の捧ぐる花を胸に抱けば

長生きをせよといふ声不思議なるひびきとなりて身にし伝は

る
とあり、正雄の喜びが英子の歌を通して蘇る。

おわりに

二〇一一年度、私は台湾において二度発表する機会をえた。一度目は花蓮県文化局の招聘により「花蓮港街に生きた渡辺よしたか・みどり夫妻」(於慈濟大学、二〇一二年九月二五日)と題したもの、二度目は国立清華大学における「後山的《紫陽花》——戦前在台日本歌人渡辺義隆の生涯与文学——」(二〇一二年三月二〇日)であり、台湾文学における戦前期在台日本歌人の再評価が始まっていることを実感する。

頼衍宏氏は、「台湾短歌研究の特徴は、歌人による著作と研究成果が出色であるという点である」と述べ、今後の研究「結社を中心に研究する方法」を提言し、かつ実践もする(『日本語時代の台湾短歌(一)——結社を中心にした資料研究——』『あすなろ』第一四一号、あすなろ社、二〇〇八年)。頼氏の響に倣って、私は『あぢさゐ』に集う在台日本歌人の研究を進めることにしたい。

本稿は、浜口英子の台湾との関わりを描くことを縦糸とし、英子と交友のあった陳奇雲と植村蘭花の足跡に言及することを横糸とした。両者の織りなす絵模様により、知られざる在台日本歌人の足跡をどこまで描きえたか、評価は読者に任せることにしたい。